桶川市マスコットキャラクター「オケちゃん」

OKEGAWA hon プラス+ 通信

オケガワホンプラス

No.24
不定期発行

テーマは「在る」ことの哀しみをみつめる本 特集

今回も「OKEGAWA hon プラス+スタッフがおすすめする本」です。

人は、誰もが生きてゆくにあたって「哀しみ」を抱えざるを得ないのではないでしょうか。

読むことで、その哀しみや、生きてゆく事の意味、などを深く考え、そして作中登場人物に共感することで心が何か楽になるような、そんな本たち。

読書の醍醐味である、作者を通じて自分と深く対話をしていく体験に立ち返ることのできる、読書の秋ならではのしっとりとした良書を選定しておすすめします。

かなしみがいっぱいにつまった殻から顔を出して

『でんでんむしのかなしみ』

新美 南吉・作
かみや しん・絵
出版社：大日本図書
ISBN：978-4-4770-1023-6

新美 南吉・作
鈴木 靖将・絵
出版社：新樹社
ISBN：978-4-7875-8619-3（品切）

・**中央図書館**に蔵書があります

新美南吉さんは1913年生まれで、今年で生誕110周年。この童話は「デンデンムシノカナシミ」として東京外国語学校在校中に執筆されました。

でんでんむしが背負っている、そのからだに見合わない大きな殻には、かなしみがいっぱい詰まっているのだという説明にはとても心を打たれました。そのでんでんむしの告白を聞いて、私も私のかなしみをうっかり見つけてしまったように思えます。見つけてしまったからには、もう見つける前に戻ることはできないのです。

この物語を終わりまで読んで、ハッピーエンドに思えるでしょうか。ぜひ大人にも子どもにも読んでいただきたい絵本です。

画像提供：桶川市図書館

・**中央図書館**、**桶川図書館**に蔵書があります

OKEGAWA hon プラス+

新美さんのいとしい童話たち

『新美南吉童話集』

新美 南吉・著
千葉 俊二・編

出版社：岩波書店（岩波文庫・刊）
ISBN：978-4-00-311501-5

誰もが幼少のころに親しむ新美南吉さんの童話ですが、大人になって改めてこれらの作品を読み返すと、子ども向けとは思えない、何とも言えないしみじみとした味わいを感じます。

『ごんぎつね』の、ごんと兵十の孤独な者同士のつかの間の心のふれあい、『てぶくろをかいに』のほのぼのとした物語の中でもお母さん狐の感じている哀しみ、『うた時計』の不器用な親子のすれ違いの哀しみ。

新美さんが背負った哀しみが、そこはかとなく作品ににじみ出てくるのでしょう。

明るさの中に哀しみが溶けている。30歳になる前に世を去った若者が書いたとは思えない芳醇な作品たちです。

・**桶川図書館**に蔵書があります

河はすべてを包み込んで流れてゆく

『深い河（ディープ・リバー）新装版』

遠藤 周作・著

出版社：講談社（講談社文庫・刊）
ISBN：978-4-06-523448-8

「日本人にとってのキリスト教」を生涯考え続けた著者の、集大成ともいえる作品です。

舞台はインド。「東西南北から多くの巡礼客が死ぬためにやって来る」聖地「ヴァーラーナスィ」。聖なるガンジス河で、生きている人々は沐浴し、死んだ者は荼毘に付されて遺灰は流されます。

その地に訪れた、様々な悩み苦しみを持った日本人ツアーの人々。それぞれの思いをガンジス河は受け止めて流れてゆくようです。それぞれの登場人物に明確な解決策はもたらされませんが、何もかもすべてを受け止めるガンジス河という存在が、著者の到達した一つの答えのように思われてならないのです。

・**桶川図書館**に蔵書があります

ああ、これはおれだ

『告白』 町田 康・著

出版社：中央公論新社（中公文庫・刊）
ISBN：978-4-12-204969-7

どうか、この本の分厚さに尻込みしないで下さい。

実際に起きた事件をモチーフに、一人の男がなぜそのようなことを起こすに至ったかを、作者はすごい熱量と言葉の連射で語り切り、読者はそれにのみこまれるしかありません。

自分の存在が周囲とかみ合わない、わかってもらえない、仲間に入れてもらえない、という思いは、誰もが一度は感じるのではないでしょうか。生きることに不器用で空回りする主人公の、そうせざるを得なかった哀しみが読む者の胸を打ちます。

もはや読書ではなく人生体験です。あっ、ただ作者の表現は軽妙でもあり、決して読んでいて重く息苦しくはありませんので、ご安心を。「それって素敵」「おほほん」。

どうか、この本の分厚さに尻込みしないで下さい。

・**桶川図書館**に蔵書があります

哀しい登場人物たちが全員、自分のようで、人間のようだ

『人間』 又吉 直樹・著

出版社：毎日新聞出版
ISBN：978-4-620-10843-8
出版社：KADOKAWA（角川文庫）
ISBN：978-4-04-897420-2

テレビで芸人として活躍される又吉さんの佇まいを思い浮かべて読むのがおすすめです。小説の序盤、この主人公はきっと又吉さん当人を表しているのだな、世間の息苦しさや何者かになりたさの葛藤を描いた小説で面白い、とはたから眺めていられる。次第に雲行きが怪しくなり、あれ、又吉さんがもう一人出てきてしまった。さらにもう一人？読者である自分もまた又吉さんを見ているまなざしのひとつであり、小説の要素となっていってしまう。こうなるともはや私は又吉さんで、又吉さんは私であるため、この話を他人事としては読み進めていけなくてある意味では苦しい。自分を揺らがせて疑ったら分裂してしまって、他者となったまなざしが自分に視線を向けたときの押し問答が、ボケとツッコミということなのかもしれません。

・**中央図書館、桶川図書館**に蔵書があります

自分は世界に馴染めていない気がする

『水中の哲学者たち』

永井 玲衣 著

出版社：晶文社
ISBN：978-4-7949-7274-3

何かを深く考えることは、しばしば水中に潜ることに例えられるそうです。例えば哀しみについて。生きることについて。そうした曖昧だけど一大事であることを、誰もが納得してやりくりしているのだろうと諦めてしまい、ちゃんとわかろうとすることをやめてしまわなくていい。

自分で考えること、つまりなにかを問うことはときに水中にいるときのように苦しくて動きが不自由になるかもしれない、それでも。“わからない ”だらけの世界のことや自分のことを、そういうものだ、となでつけて思考を止めることをせずに、ときにはだれかと一緒になって、問うて、考えることをつづけよう。一緒に手をとって潜ってくれるとても優しい哲学者によるとても優しい本です。

桶川市立中央図書館スタッフが選んだオススメ本「哀しみをみつめる本」

『誰にも相談できません みんなのなやみ ぼくのこたえ』 高橋 源一郎・著
出版社：毎日新聞出版　ISBN：978-4-620-32618-4
100のままならない悩みに著者がお答えします。

『犯 罪』 フェルディナンド・フォン・シーラッハ・著　酒寄 進一・訳
出版社：東京創元社（創元推理文庫・刊）　ISBN：978-4-488-01336-3
ドイツの弁護士による実在の事件を元にした短篇集。中でも「エチオピアの男」がおすすめです。

『春にして君を離れ』 アガサ・クリスティー・著　中村 妙子・訳
出版社：早川書房（クリスティー文庫・刊）　ISBN：978-4-15-130081-3
殺人事件は起こらない。哀しくもあり、恐ろしくもある。

『ライオンのおやつ』 小川 糸・著
出版社：ポプラ社　ISBN：978-4-591-16002-2
若くして大病を患った主人公が死を意識し、向き合い、穏やかに日常を過ごす姿に涙があふれ出ます。

テーマに沿った本を図書館に蔵書があるものから選んでみました。図書館を是非ご利用ください

『亡くなった人にできること 死んだ人はどこへ行き、何を思うのか』
玉置 妙憂・著
出版社：総合法令出版　ISBN：978-4-86280-783-0
著者は看護師兼僧侶。大切な人を失ったときにできることは何かというテーマを人気の著者が書いています。

OKEGAWA hon プラス+（オケガワホンプラス）とは

OKEGAWA hon プラス+イベントスペースでは、OKEGAWA hon プラス+ 運営協議会（桶川市・株式会社新都市ライフホールディングス・丸善雄松堂株式会社）が主催して博物館、大学、出版社等と連携し、桶川の市民サービス向上のため、子ども向けから大人向けまで幅広い世代を対象とした学びのサポートをしています。

OKEGAWA hon プラス+でのイベントの予定についてはこちらをご覧ください▶

OKEGAWA hon プラス+

おけがわマイン 3F
〒363-0022 埼玉県桶川市若宮1-5-2
OKEGAWA hon プラス+
048-786-6353 桶川市立中央図書館

発行者：OKEGAWA hon プラス+運営協議会（桶川市・株式会社新都市ライフホールディングス・丸善雄松堂株式会社）
「202309」